

障害児の兄弟関係*

—しつとをどう解決するか—

The Relation of Handi capped Children to Their Siblings

井原成男**

Nario Ihara

はじめに.

今日は先日答えていただいたアンケートをもとにして、障害児の兄弟関係ということについてお話してみたいと思います。どうしてこのテーマを選んだかといいますと、障害児本人のことにあまりにもお母さんが一生懸命になると、どうしてもお姉ちゃんとかお兄ちゃんとかに不満がでてしまう。また、障害児に弟妹が生まれた場合どうしてもそっちに手がかかってしまう。このときにおこる障害児自身の不満をどう解決したらいいか。そういったことを中心にお話してみたいと思ったわけです。

みなさんに答えていただいたアンケートの結果についてお話する前に、そもそも兄弟関係にはどんな特徴や利点があるかということについて、簡単にふれてみたいと思います。表1をみて下さい。

表1 兄弟関係の利点

1. 大人より真似しやすい
2. 大人より絶対でない
3. 大人より競争事態で真剣である
4. 大人に比べて役割を交替しやすい
5. 大人(親)に叱られたときの逃げ場になる
6. 親の期待が分散する
(兄弟関係はナナメの関係である³⁾)

ここに多分こんな利点があるだろうというものをあげてみました。

まず、兄弟の行動は大人の行動より真似しやすいということがかいてあります。これは、年齢が近いので興味をもつ対象も、身体つきや大きさも、

* 本稿は港区立のぞみの家の母親勉強会での講演(フ
ランナー:細貝順子)を文章化したものである。

** 港区立のぞみの家(〒106 東京都港区西麻布2-1-5)
(長野大学産業社会学部社会福祉学科)

能力も大人よりは近いわけです。だから真似しやすいということになります。真似しやすいということは、それだけ学習するチャンスも増えていくということなのです。次に、絶対者でないということがあげてあります。これは例えば、兄ちゃんなら兄ちゃんは、オネショをしてはいけないよといって弟をさとしても、自分も失敗してしまうということもおこります。ところが親にはこんなことはない。親が子どもに、オシッコをしちゃいけないといっておいて、自分も失敗するということはまずおこりえません。イスラエルのキブツでは年長の者がオネショなどのしつけをするので、権威像がとてゆるやかであるということなのです¹⁾。

3番目にあげてある大人より競争事態に真剣であるというのはこういうことです。つまり、オモチャの取りあいなど、子ども同士の関係はとて真剣です。これが大人の場合、相手が子どもだとどうしてもこうはいきません。子どもとオモチャの取り合いをするなんてことはまずありえません。まあだいたい子どもに譲ります。またゲームをやるにしても真剣にやったのでは大人の方が圧倒的に差をつけて、勝負になりません。だから、大人はついてかげんしてあげます。このために子どもは真剣な社会性の育つチャンスをなくしてしまうのです。次に、役割の交替というのは、子ども同士でお互いに赤ちゃんの役をとったり、兄の役をとったり、父親になったり、母親になったりできます。そういうことをさしています。ところが、大人の場合、こんなに縦横無尽には役割を交替してあげられません。アンナ・フロイトという人は、施設にいる子どもたち、子どもたち同士で24時間暮している子どもについて、相手を思いやる気持ちが一般の家庭児より早く発達するといっています²⁾。これは子どもたち同士で暮していますために早くから相手の役割を自分がとってあげなければいけない、そういうチャンスが多くなるために

おこってくることです。時にはより幼い子の方が、年長の子を助けることさえあるのです。最後に5と6の、親の叱責・期待が分散するということがあげられます。これは私自身の母親の例ですが、私のイタズラに怒ったときは、カッときて自分の生んだ順に子どもの名前をいっていました。私は4番目でしたので、自分の名前が正しく呼ばれる前に、すっとなで逃げるということができました。これが自分一人の一人っ子ですと、逃げる暇はなくなってしまふわけです。また、子どもが一人しかいなかったら、親の期待も失望も一身に被らなければいけないわけですが、兄弟がいるとこれが人数分、分散されます。この点、とても気が楽です。また表にはあげませんでした。兄弟が多いと、大人になってから、誰が親をみるかという問題でも幅ができますし、困ったときもなにかと助けになってくれます。これはまあ、兄弟関係がうまくいっている場合にかぎりませうけれど。

以上の事は裏返すとすべて欠点にもなりえます。つまり小さいうちから社会性を身につけねばならず、もまれるわけですので、一人っ子ならどんなに天国だろうと思うわけです。しかし、我々は遅かれ早かれ、いずれは社会の中に入っていくわけですから、大雑把にみて、社会性が早くから身につくというのは利点ではなからうかと思いません。

兄弟の関係はよく「ナナメの関係」⁹⁾といわれます。これは以上のお話からも分っていただけだと思うのですが、親子は「上下というタテの関係」、仲間は「競争・協調というヨコの関係」ということ、兄弟は丁度この中間にあるということで「ナナメの関係」と表現されているわけです。

I アンケートから分った兄弟関係

アンケートは、①上の人(兄・姉)がいてよかったことはどんなことですか? 困ったことは何ですか? ②下の人(弟・妹)が生れてよかったことはどんなことですか? 困ったことは何ですか? ③困った問題をどのように解決しましたか? という3つの項目からなっています。一人っ子の人には兄弟がいればよかったと思うことは何ですかときいてあります。

A 兄弟構成について

22人のお母さんが回答してくれました。30名にアンケート用紙を渡しましたので、かなり回収率はよいと思います。22名中、一人っ子は3人(14%) (男2人, 女1人), 2人っ子15人(68%) (男一男5人, 女一男6人, 男一女3人, 女一女1人), 3人兄弟4人(18%) (男一男一女2人, 女一男一女1人, 女一男一男1人)でした。2人っ子の時代⁹⁾といわれていますが、のぞみの家でも2人っ子が68%と圧倒的に多く、今や子どもは2人という時代であることが分かります。子どもの数の平均は2.1人で、これもだいたい全国平均⁵⁾と同じぐらいです(全国平均=2.0人, 1974年)。本人が1番下の人が16人いました。(注 これは22人中16人でかなり多い。その子に手がかり切りで、とても次の子を生むどころでない。あるいは、次の子が障害児であつたらどうしようという恐れからなかなか次の子を生めないということが反映されていると思われる。)

表2 上の人(兄)がいてよかったこと*

兄のいる人について

遊んでくれる	30%(6)**
あずかってくれる (みはり番・留守番・私が助かる)	30%(6)
真似する	15%(3)
お互いのことが分かる	<input type="checkbox"/>
ケンカの相手がいる	<input type="checkbox"/>
普通学級にしている	<input type="checkbox"/> 5%(1)
身の回りの世話をやいてくれる	<input type="checkbox"/>
にぎやかで明るくなる	<input type="checkbox"/>
友人を連れてくる	<input type="checkbox"/>

姉のいる人について

遊んでくれる	31%(5)
真似る (コトバ・まねして競争する)	24%(4)
あずかってくれる (留守番・みはってくれる)	19%(3)
友人を連れてくる	<input type="checkbox"/> 12%(2)
身のまわりの世話をやいてくれる	<input type="checkbox"/> 6%(1)
にぎやかで明るくい	<input type="checkbox"/>

* N=15 (兄のいる人8人, 姉のいる人7人)

** ()内は実数(回答は何個あつてもよいので人数とは一致しない)

B 上の人との関係について

表2をみて下さい。これは上の人(兄・姉)がいてよかったことについて、こちらでまとめてみたものです。上が兄のいる人についてですが、これをみると、「遊んでくれる」、「あずかってくれる」、「真似する」がほとんどを占めています。この3つで75%を占めています。これは姉の場合も同じで、この3つで74%を占めています。兄と姉がちがうことといえば、兄はどちらかというところと「あずかってくれる」というのが多いのですが、「姉の場合は「真似る」というのが多いのです。お姉ちゃんの方が、先生的な側面が強いということなのでしょうが、共通していえることは、上の方は、かなり遊んでくれたり、あずかってくれたり、親の手伝いをしてきているということです。これは裏返してみると、本人たちにとって負担となってしまうやすいということになると思われま

す。ところで、よかったことの中に「ケンカの相手がある」というのが入っています。これはほとんどの人が困ったことの中に入れていますが、社会性が育つ、そのためには相手がいるということが分

表3 上の人がいることで困ったこと*

兄のいる人について

甘えたい・下の人だけかわいいのだとしっとする	<input type="checkbox"/> 22%(2)**
上の人にかまうと下の人が欲求不満になる	<input type="checkbox"/> 22%(2)
上の人時間がなくなる	<input type="checkbox"/> 22%(2)
どうして何もできないのかときく	<input type="checkbox"/>
仲間はずれにする	<input type="checkbox"/> 11%(1)
わけの分からないコトバを真似する	<input type="checkbox"/>

姉のいる人について

時間がとれない(上の人に)	<input type="checkbox"/> 31%(4)
自分も甘えたい・どうしても自分だけいけないのかときく	<input type="checkbox"/> 23%(3)
下の人に邪魔される(オモチャをこわす)	<input type="checkbox"/> 23%(3)
上の人悪いことまでまねる	<input type="checkbox"/>
ケンカがたえない	<input type="checkbox"/> 8%(1)
ヒスをおこす	<input type="checkbox"/>
仲間はずれにする	<input type="checkbox"/>

* N=15 (兄のいる人8人, 姉のいる人7人)

** () 内は実数

ければ「ケンカ」はよいことにも入れることができるのです。見方によって同じ行動がよいことになったり、困ったことと考えられたりするというのは大変面白いことだと思います。

表3をみて下さい。これは困ったことの方です。兄についていうと、「下の人にしっとする」、逆に「下の人しっとする」と「上の人時間がなくなる」といったことです。これはつまり時間をたっぷりあげないと「しっと」する^{6,7)}ということです。この問題で66%を占めています。お姉ちゃんの場合についてみると、少し表現がちがっています。「上の人に時間がとってあげられない」、「上の人しっと」、「下の人に邪魔される(オモチャを壊す)」の順で、合計すると77%で大勢をしめています。兄と姉を比較してみすと、兄の方が「時間がとってあげられない」が22%だったのに姉の方は31%と一位になっています。これはお姉ちゃんの方が母親から同情されている。いい代え

脚注

姉が我慢するというパターンは、特に姉一弟の組み合わせに多いのではないと思われる。依田によればこの組み合わせは弟にとって最も調和的関係をもつことが可能で、姉にとっては弟の優位を認めやすい関係であるとされている。依田はこの理由を、姉は幼いときから「あなたはお姉さんなのだから、がまんしなさい」とくりかえしいわれてきた結果ではないかとしている⁵⁾。この関係はいわゆる「一姫二太郎」の組み合わせである。本アンケートでも、このような組み合わせの6人に同様の傾向が多かった。この組み合わせをもつ、ある5歳の女の子(姉)が筆者に手紙をくれたことがあるが、それには「おとうとがいつもおせわになっています」とかいてあって苦笑したことがある。この女の子はいつも、弟のめんどうをみ、「小さな保母さん」と呼ばれる程かいがいしかった。筆者は、古事記の中のアマテラス(姉)とササノヲ(弟)の関係にも、似たような状況を見てとれると思う。ササノヲ(弟)のなす数々の悪行をアマテラスは、結局許すように思われる。アマテラスは最後にはアマノイワトから出てくるのだから。これはまさに姉というより、母親的(母性的)態度なのだという立場から、河合ら¹⁰⁾はササノヲ論を展開している。このように考えると、姉が母の同情をひくという構造はより理解しやすいものとなる。姉はここでは母と同一視されているのではなからうか?

ると、兄より姉の方がじっと耐えて面倒をみている様子がありありとみえるということなのでしょう。こう考えてみると「下の人に邪魔される」という表現も母親からの同情的感想をこめたいい方のようにみうけられます^{脚注}。

表4 困ったことの解決方法

(上の人との関連にて)

1. 説明する(病気のこと、まだ小さくて仕方ないということ)
2. かわりばんこにおんぶ・だっこ(交互に接する、両方に同じことをさせる)
3. 思いっきり遊んであげる時間をつくる
4. 近所の人、父(夫)の協力で切りぬける
5. 年齢がくれば分かる
6. オモチャは2つ買う
7. ケンカは両成敗

表4をみて下さい。これはお母さんなりの解決方法をいくつかの項目に分けてみたものです。7つの項目ができました。これをさらに3つのポイントにまとめてみました。ひとつは時間のことです。これについては、両方になんとか時間をとってかかわってあげるという解決方法がとられているようです。交互にかまってあげるということですね。具体的には、下の人が寝てから遊んであげるとか、お父さんの協力をえて、例えばお姉ちゃんはお父さんが遊んであげるといったことです(これは案外気づかれていないことですが、お姉ちゃんは、お姉ちゃんだからということで損していることが多い。お姉ちゃんだから我慢しなさいというわけです。ですからたまには、お姉ちゃんだからディズニーランドに連れて行ってあげるとか、お姉ちゃんだから得をしたという体験をたまにはさせてあげることがとても大切なことだと思うのです)。またこれは大変面白い解決方法だと思うのですが、ある3人のお嬢さんのお母さんは、下の人の写真をみんなでみるときはいつも必ず、上の人たちの小さかった頃の写真をみせて、あなたは覚えてはいないだろうけれど、こんなにかわいがってあげたんだということを見せつけてあげていました。またこのお母さんは、たまに上のお姉ちゃんだけ連れて例えば東北旅行にでかけたりしていました。このような楽しい体験は、お姉ちゃん

にとって、一生残るたのしい思い出となっていくと思われま。

次のポイントとして、「しっと」という問題があげられます。障害児には実際手がかかってしまうので、この問題を解決するのはとてもむずかしいことです。この「しっと」心に対する心構えとして、「しっと心を表現することは決して罪悪ではない」ということをしっかりと頭に入れておくことが大切です。この問題についてはあとで症例をだして、いかに「しっと」を表現することで、しっとが解決されていくかという見事な例を考えてみたいと思いますので、このへんにしておきます。

次の第3のポイントとして、障害のことをどう説明するかという問題があります。つまり、下の人の障害の問題をどのように上の人に説明してあげるかということです。多分、上の方は、どうして～ちゃんはいつまでも自分でできないの? どうしてボクはいけないのに、～ちゃんだけいいの? といった質問をしてくると思います。これは上の方の年齢によって答え方が違ってきます。病気なのだという説明もあれば、まだ赤ちゃんなのだから仕方ないといった答え方もある。さまざまの答え方が、その子の年齢に応じて考えだされなければいけないわけです。

これは子ども療育センターの秋山先生のいわれていることなのですが⁹⁾、障害児のことをお姉ちゃんなり、お兄ちゃんに将来も頼むというとその子に重荷になって反抗するけれども、お前はお前の道をいきなさい! 私がこの子はみるからといって障害児を一生懸命かわいがると、かえってそのかわいがっている様子を見て、よく面倒をみしてくれるようになるというのです。これは障害児に対する母親の態度を他の兄弟が自分の中に取り入れ(同一化)していった結果だと思われま。同じ障害の程度でも家族によって雰囲気は全く違ってきます。より雰囲気の良いややかな家庭の方が、障害児自身のパーソナリティにより影響を与えるということがいえると思います。

上の方はいい上の人(いい姉、いい兄)であること、おりこうさんであることによって、親から褒められ、みとめられる。そういう賢い解決方法によってこの難問をのりこえていくのだと思われま。私自身も6歳はなれた妹がいますが、丁度妹

が生まれた頃、あれて学校で問題をおこしていたことを思い出します（6歳にもなっていたのにそうでした）。そして、妹の面倒をよくみてあげ、彼女が少し大きくなってからは、いつも自分の遊びに妹を入れてあげる、よいお兄ちゃんになることで親からも褒められ、そういう形でこの時期をのりきっていったように思います。

ところで、下に障害児がいるお兄ちゃんにとっては、下の人に手がかかる、下の人が赤ちゃんである時期がそうとう長びく、そんな兄弟関係になっていくのではないかと？ そんな風に私はイメージしています。

C 下の人との関係について

表5をみて下さい。今度は下の人との関係について分ったことです。まずよかったこと。弟については「よく遊ぶ」、「よい刺激を与える」、「競争心がでる」、「真似る」などがあげられています。ところで面白いことに、下の人が妹の場合には、「母に余裕がでる」というのが上位にきています。これは上がお姉ちゃんの時にも感じたことですが、母親にとって女の子は、手助けになってくれる。「余裕」ができるというかんじがつよいのでしょうか？ これぐらいの人数でははっきりしませ

表5 下の人がいることでよかったこと*

<u>弟のいる人について</u>	
よく遊ぶ	<input checked="" type="checkbox"/> 30%(3)**
よい刺激を与える	<input type="checkbox"/> 20%(2)
競争心（自立心）がでる	<input type="checkbox"/> 20%(2)
真似やすい	<input type="checkbox"/> 20%(2)
母に余裕（はりあい）がでる	<input type="checkbox"/> 10%(1)

<u>妹のいる人について</u>	
母に余裕がでる	<input type="checkbox"/> 22%(2)
よく遊ぶ	<input type="checkbox"/> 22%(2)
よい刺激を与える	<input type="checkbox"/>
競争心がでる	<input type="checkbox"/> 11%(1)
真似やすい	<input type="checkbox"/>
下の人がよく面倒をみる （3人兄弟の場合）	<input type="checkbox"/>

* N = 6（弟のいる人3人、妹のいる人3人）

**（ ）内は実数

んが、ひとつの傾向、仮説としてあげておきたいとします。

表6をみて下さい。困ったことについてあげてあります。下の人が弟の場合、やはり「しっと」の問題が多くをしめています。つづいて「時間がなくなる」ということがあります。下の人が妹の場合も同じような傾向があげられます。ただ、妹の方が少し大きくなってくると、お兄ちゃんお姉ちゃんが手がかかるということで我慢させられ、その姿をみていると「さびしそうだ」という、母親の側の感情表現があげられていました。

下の人との関連で困った問題を解決する方法としてお母さん方があげたものを7つとりあげてみました。これが表7です。この場合、いきかせるべき対象となる上の人が障害児ということになるので、「しっとと心」に対する解決方法や説明はさらにむずかしいものになってきます。上下ともに

表6 下の人がいることで困ったこと*

<u>弟のいる人について</u>	
上の人の甘え・しっとがひどくなる	<input checked="" type="checkbox"/> 38%(3)**
下に手がかかって時間がなくなる	<input type="checkbox"/> 25%(2)
上下同時に病気になったとき	<input type="checkbox"/> 25%(2)
下がオモチャをとるとき	<input type="checkbox"/> 13%(1)

<u>妹のいる人について</u>	
下の人に手がかかって時間とれない	<input type="checkbox"/> 72%(5)
怒り方が分からない	<input type="checkbox"/> 14%(1)
妹の方が寂しそう	<input type="checkbox"/>

* N = 6（弟のいる人3人、妹のいる人3人）

**（ ）内は実数

表7 困ったことの解決方法

（下の人との関連にて）

1. 下の人が寝てから遊んであげる
2. 上下同時に病気にしないように気をつける
3. 父に協力してもらって分担（実家・家政婦にあずける）
4. 公平にあつかう
5. かわいがり方を教える（いきかせる）
6. 年齢がたって怒らなくてすむようになる
7. 下の人の年齢がたって他の子と遊べるようになる

公平にあつかうという点では、上の人がいる場合と同じですが、かわいがり方を教えるというところが、くり返し教えてあげなければならない、よりむずかしいところになります。これはとてもむずかしい。障害児である上の人がよく分からないで、もたついているうちに7にあげてあるごとく、下の人年齢がいった他の子と遊べるようになったり、お兄ちゃんより理解力が優ってきたりするようになってきます。こうなってくると下の子の方がお兄ちゃん、お姉ちゃんという感じになっておいこしてしまうのだと思います。

上の人障害児の場合、下の人と極端に年齢がちかく生まれたような兄弟関係になります。その点で、同じくらい手のかかる子が2人いるという極めて大変な状況になるわけです。このような状況で、2人が同時に病気になったときなど、父や親戚、近所の人の協力がえられればいいのですが、そうでない場合は、ボランティアなどの社会的資源を利用せざるを得ないでしょう。

D 一人っ子の場合

今までは兄弟のいる場合でした。次に表8をみて下さい。これは一人っ子の人3人いましたので、その母親に兄弟がいたらよいなあと思う点をかいてもらいました。これをみて分かることは、上の人、下の人がいる人が、利点としてのべているものがすべてでているということです。という

表8 一人っ子の人について*

上の人がいればよいと思うところ

1. いっしょに遊んでくれる(遊び方を教えてくれる)
2. めんどくさくみてる
3. ものを覚えるのはやい(話しかけてくれる)
4. ケンカもしてくれる
5. 他の子ともはやく遊べるようになる

下の人がいればよいと思うところ

1. いたわりの心ができる(やさしさ、協力)
2. さびしい
3. 社会性が育つ

*上・下いて困ると思うことについてはきいていない。

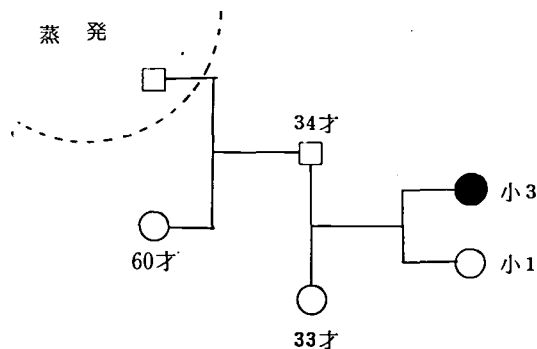
ことは、実際に兄弟がいなくてもお母さん方は兄弟のいるよい点はだいたい分かっていらっしゃるのでは? ということになると思います。また、このアンケートに答えて下さったお母さん方は現にこうして、のぞみの家というグループに参加しているわけですので、子どもが多勢いることの利点を体験して知っているのだともいえるように思います。

「ケンカもしてくれる」という答えは、ケンカが利点の方に分類されていることをしめしています。ただ、「いたわりの心がでる」とか「一人っ子だとさびしい」というのは、兄弟のいる人のところででてこなかったものです。実際に兄弟ができると、母親にとっては大変なことばかりで、このように、理想的に考えていた面は吹っこんでしまうのかもしれない。

II しっとの症例

アンケートの中でもっとも困る問題の一つとしてしっど心ということがありました。お母さん方は、公平に時間をとってあげる努力をしたり、障害児の病気について説明して、その子に手がかかるんだということを説明してあげたり、さまざまな解決の努力をしておられるようです。私もそれにいくつかの解決方法をつけ加えてみました。しかし、いくら努力しても、実際に障害児には手がかかるのであり、努力でしっど心が消えてしまう訳ではありません。これはとてもむずかしい問題です。これをどのように解決したらよいのでしょうか。この問題について症例をあげて解決のヒン

図1 症例の同居家族



トをさぐってみたいと思います。

図1をみて下さい。これは私が病院の外來でみている登校拒否の子の例です。この子は小学校3年生の女の子で小1になる妹がいます。不登校のそもそものきっかけは、学校の給食で食べたくないものがあり、それを食べるようにいわれたこと、鉄棒ができないのを先生にはげまされたのが、本人にとっては叱られたようにかんじられたということなのです。ところで、このようなきっかけがあったということは治療を始めてだいぶたってから分ってきたことなのです。この子は嫌なことをすぐに嫌！といえない、無口な子なのです。すぐに言えば問題はそんなに長びかなかったと思うのです。ところで、学校でのきっかけはそういうことなのですが、家においても学校に行けなくなるきっかけがありました。それは、小1の妹が学校にあがるので、ピカピカの机をおじさんに買ってもらったことにはじまります。妹のピカピカの机に比べて、お姉ちゃんのがあまりにも見すばらしかったので、おじさんがこの子にも買ってあげようとしたのです。本人は買ってほしかったのに「いらない」と答えました。本当はほしかったのだということは、のちに学校に行かなくなってからやっと分かったことなのです。治療が進行するにつれて、この子には、妹に対する「しっと心」がつよいということがはっきりと分かってきました。また本人もそれをコトバに出していうようになりました。ところで、同じような事件は実は、この子が3歳のとき、つまり妹が生まれたときにもおこっていたのです。本人は妹が生まれるので、同じ敷地内のおばあちゃんのところへ預けられたのです。ところが、この子は、「お母さんがいなくてさびしかった？」ときかれても「いいえ」とこたえ、2週間もたってから、「あの時、本当はさびしかった」といったそうです。もともと、お母さんとおばあちゃんはうまくいっていなかったのですが、「あんたがいなくてこの子は本当にさびしかったそうだよ」と母親のくせにそんなことも分からないのかい、といった風にいやみったらしくいわれて、お母さんとしてはそうとうショックだったようです。このように、この子は昔から、自分の率直な気持ちを表にだしていわない（いえないといった方がいいかもしれませんが）ことがあ

ったということなのです。妹が退院して家に連れてこられたときも、何の反応もしめさず黙っていたそうです。たいていのお母さんなら、本人がいてくれなくても、このような気持ちがあることに気づくと思うのですが、ところが、このおしゅうとさんは(図をみて下さい)、自分の旦那さんも追いだしてしまったほどの強い人なのです。その上、お母さんとお父さんは、このおばあちゃんのところ勤めているという形になって給料をもらっている。おばあちゃんは事業主なんです。それぐらい実権のある人であるわけです。そんなところに、11人兄弟の末っ子であるこのお母さんはお嫁にいったのです。互角に渡り合えるわけがありません。いつも、この子を連れて公園にいつの間だけが息ぬきの時間だったといいます。公園でこの子が何をして遊んでいたか、そんなことには関心を向ける余裕もありませんでした。だから、お母さんはこの子のことについて、まったく心理的には何もしりませんでした。

治療を進めていくうちに、この子が最も変化したのは、思っていることを、いいこと悪いこと含めて、どんどん言うようになったということです。まず母親を独占するという形で、妹への「しっと」があらわれました。妹が少しでも母と話していると嫌がるのです。そのうち、はっきりとコトバにだして妹へのしっとを表明するようになってきました。これまで出せなかったものが一気に表明されていったのです。私も、コトバによる表明をおおいに奨励しました。そのことによってこの子は次第に自我がきたえられ、やがて7カ月のち、登校を始めるようになっていきます。コトバでしっと心を表明するということはとても大切なことです。かつ、それを我々は悪ととるべきではないと思います。しっと心は悪かもしれないが、少なくともそれがあることは全く、正常なことなのであり、ましてや、それを表明することは必要なことですらあると思います。なぜなら、表現された「しっと心」は、こちらにも分かる。ああ、この子にはそういう気持ちがあるのだな、そういうことでつまづいているのだなと分かるわけです。いつくれば分かります。

面白いことに、妹の方も、どうしてお姉ちゃんだけ学校にいかなくていいの？ と自分の不満を

表明しはじめます。この妹の方はしかし、1週間で登校できるようになりました。姉への「しっと心」をちゃんと表現できたからです。もう一度強調しておきますが、「しっと心」をもつのはまったく正常なことなのであって、それをもってはいけないと思うべきではないと思います。そんなことを親の側が思っていたら、子どもは自分の気持ちを表現しにくくなってしまおうと思います。あらかじめクサイものにフタをするのではなく、気楽に思っていることをいいあえてこそ、「しっと心」について話し合える場（あるいはやりあえる場）ができるのです。以上で終わらせていただきたいと思ひます。

おわりに

このあと母親たちとの質疑応答がおこなわれた。色々興味深い問題がとりあげられたが、共通して筆者が感じたのは、いわゆる問題行動らしきものがあると、それを悪いものと思ってショックをうけてしまっているということだった。筆者としては、むしろ問題行動はその子なりに困っていることを表現しているものなのだ、という見解をとりたい。もちろん、その表現の仕方はヘタなのだということであるのだけれど。しかし、ヘタはヘタなりに表現しているのだから、その表現を一応うけとってみて、なにをいわんとしているのか考えてみることによって始めて、我々は、相手の表現を上手なものに変えていけるコマを手にするのだと思う。これに対応して、母親の側にも、つい、子どもを怒ってしまった、自分は悪い母だという強い罪悪感がある。我々はしょっちゅう怒っているのであり、それを表現することにそのような罪悪感をもってしまふことはまったく必要ない、と筆者は思う。そのような罪悪感をもってし

まうことは、ますます親の態度を自信のないものにしてしまうのではないだろうか。

たまたまこの原稿をかいている日の新聞（朝日新聞1984年3月20日朝刊）に中上健次氏の次のような一文があった⁹⁾。

……うちは子どもをしかるとき体罰を加える。女房にも言葉でいって駄目なんだから、ぶっとばせて言っている。しりをぶつ。ぼくもやります。それと暗い場所に閉じこめて立たせておく。紀州と違って、東京じゃ、便所の中ぐらいですけれどもね（太字は筆者）……

氏はさすがに自信をもって体罰を加えておられる。それ故に、しりというもつとも安全なところをたたいたり、便所（東京の便所は水洗なので落ちる心配もなく、我々にとってはむしろ、最も心やすらぐ場所でもある）という特別な場所を選定することができるのだと筆者には思われた。

引用文献

- 1) ベツテルハイム, B. (中村悦子訳) : 夢の子どもたち (キブツの教育) 白揚社, 1977.
- 2) フロイト, A. (中沢たえ子訳) : 家庭なき幼児たち 上 (アンナ・フロイト著作集 3巻) 岩崎学術出版, 1982.
- 3) 依田明 : ひとりっ子, 光文社, 1973.
- 4) 詫摩武俊 : ふたりっ子の時代, 朝日出版社, 1981.
- 5) 依田明 : 家族関係の心理, 有斐閣, 1978.
- 6) チマン, E. (辰見敏夫訳) : 子どものしっと心, 法政大学出版局, 1975.
- 7) 荻野恒一 : 嫉妬の構造, 紀伊国屋書店, 1983.
- 8) 秋山泰子 : 小児てんかんと情緒障害 (てんかん講座 1), 日本てんかん協会, ぶどう社, 1981.
- 9) 中上健次 : こどもと私, 朝日新聞, 1984年3月20日朝刊.
- 10) 河合隼雄・湯浅泰雄・吉田敦彦 : 日本神話の思想 (スサノオ論) ミネルヴァ書房, 1983.